

D-6 保育における「価値」の検討 ― 「きたない」をめぐって(その2) ―

山口大 教育

工藤 啓子

前回に引き続き、保育の場において、子どもあるいは保育者が「きたない」と感じてしまった現象をいくつか検討してみた結果、次のように考えた。

① 「きたない」という感覚は、人間の生物的基本盤(唾液、排泄物、分泌物、食物、ぬ)あるいは生命を思いおこさせるもの(大地、濁水、混合物、形のくずれたもの、無秩序、異質なものの出会い等)に対する忌避の感覚である。これらは、一方では忌避の感覚をおこさせるが、同時に人と人とを結びつける潜在的な力を持っている。

② 「けがれ」を払ふ行為は、「食べる」「なめる」「ふれる」ぬであるが、これらの行為もまた同時に人と人とを結びつける力をもっている。

③ 秩序志向性をもった人間は、自らの生物的基本盤を克服することによって「進歩」してきた。秩序ある意識という観点からみると、生物的基本盤は無益な混沌以上の何者でもない。しかも人間は、それらが秩序を乱す、あるいは逆もとりさせることを無意識のうちに知っている。故に、意識レベルでの自己の保存を果たそうとする時、生物的基本盤は遠ざけられる必要がある。

④ しかし、この生物的基本盤なしでは、真に安定することはできない。意識的な世界で生き生きと生きるためにも、この根底的な、生命的世界を十分に生き生きすることが必要である。

⑤ 成長、あるいは自立ということは、これらの二つの世界の断え間なき相互交渉のプロセスであると考えてる。